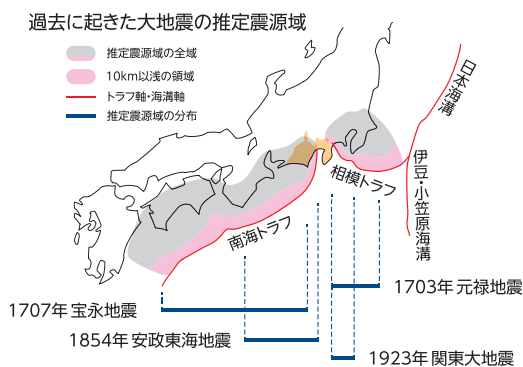


津波痕跡情報

【留意事項】

- 津波痕跡情報は、平成28年1月末時点で静岡県統合基盤地理情報システム (<http://www.gis.pref.shizuoka.jp>) および 東北大学津波痕跡データベース (<http://tsunami-db.irides.tohoku.ac.jp/tsunami/kiyaku.php>) で公開されている情報であり、行政機関・大学等によって収集された情報です。
- 東北大学津波痕跡データベースに基づく痕跡情報については、痕跡情報信頼度A～Dのうち、A,Bを抽出しています。
(参照：東北大学津波痕跡データベース「用語集」)
信頼度A：古文書・郷土史等に記載され、痕跡の場所を現在でも確認でき、しかも近年になって測量されて高さの確定されたもの
信頼度B：古文書・郷土史等に記載され、痕跡の場所を現在でも確認できるが、近年の再測量のなされていないもの
- 津波痕跡情報については、「1703年 元禄地震津波」「1707年 宝永地震津波」「1854年 安政東海地震津波」「1923年 関東大地震津波」から抽出して掲載しています。
- ここに掲載されている情報が、静岡県内の全ての津波痕跡情報ではありません。
- 津波痕跡情報は、あくまで文献や痕跡から確認されたものであり、過去の被害の有無や、将来における安全度を測るものではありません。
- 静岡県は、ここに掲載されている津波痕跡情報の使用に関して生ずる一切の損害について責任を負いません。



| 市町名 | No. | 場所 | 痕跡情報 | 情報元 | |
|--------------|----------------|--------------------------------|--|---|-------------------|
| | | 地震名 | | | 出典 |
| 下田市 | ① | 了仙寺 | 1854年(安政元年)の安政東海地震の津波で了仙寺では本堂が少々痛み柱に船の当たった跡が付くなど記録があります。このことから津波の高さは6m程度と想定されています。崖を背にしている水位もゆっくりと上がったことから被害を軽減させる要因であったと考えられます。ペリー総督の『日本遠征記』には下田町民は『落胆せず、不幸に泣かず、男らしく仕事に取りかかり、意気阻喪することもほとんど』なく仕事に取りかかったとの感想が述べられています。 |  了仙寺 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | ② | 稲田寺 | 稲田寺では本堂の床に泥がつくと記録があります。これにより津波の高さはこの付近では3.5m程度と推定されます。下田奉行支配組頭 黒川嘉兵衛の手記やロシア軍艦ディアナ号の遭難記などから、1854年(安政元年)の安政東海地震の津波が地震からほとんどなくして(推定15~20分)港内に押し寄せたことが読み取れます。高さはおよそ6mで川沿いでは流れが早く流失家屋が出ました。しかし崖に近いところではゆっくりと水位が上がったことが伝えられています。 |  稲田寺 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | ③ | 宝福寺 | 1707年(宝永4年)宝永地震の津波の高さは5~6mで、宝福寺裏竹林まで達し、1703年(元禄16年)元禄地震の津波では、高さは3~4mに達し、宝福寺の大門に達しました。 |  宝福寺と八幡神社裏の竹林 | 県GIS |
| | | 1703年 元禄地震津波 1707年 宝永地震津波 | | | 静岡県地震災害史 羽鳥徳太郎 |
| | ④ | 宝福寺 | 下田仮役所であった宝福寺で、床上3尺(約90cm)程度浸水したといわれています。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | ブーチャチンと下田(森義男著) |
| | ⑤ | 波布比神社 | 1854年(安政元年)の安政東海地震の津波でこの神社の上の田畑まで千石船が押し寄せてきましたが、この境内には浸水しませんでした。したがってこの辺の安政東海の津波の高さは3m程度と推定されます。 |  波布比神社 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 記載なし |
| | ⑥ | 下田 | 日本地震史料には、筆者のまとめとして「宝福寺(路面T.P.上2.8m)裏、竹林まで津浪来る。岡方村のこらず流失。」また、本文に「波先は宝福寺中後園竹林の際に至る。」と記録されています。岡方村は下田市街の山手側(標高3m程度)にあり、この集落が被災していることから、よほど大きな流速を考えないかぎり、このように多数の家屋が流れ出すことは考えにくく、恐らく安政津波の波高に近い5~6m程度であったといわれています。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年 宝永地震津波 | | | 日本地震史料(1951年) |
| | ⑦ | 八幡神社 | 伝承によれば、津波は八幡神社境内の石段3~4段目まできたといわれています。 | | 東北大学DB(A) |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 日本地震史料(1951年) |
| | ⑧ | 下田市三丁目 | 七軒町は、昔5.1mの津波を受けたときに、7軒だけ家が流出することなく残ったことに由来しているといわれています。 | | 東北大学DB(A) |
| 1707年 宝永地震津波 | | 新収日本地震史料第三巻別巻 | | | |
| 東伊豆町 | ⑨ | 八幡神社 | 1854年(安政元年)の安政東海地震では震動による被害は軽かったようですが、家屋の浸水のみとの記録があります。津波の高さは平均海面上4~5mで、八幡神社は無事でした。 |  稲取 八幡神社 | 県GIS |
| | 1854年 安政東海地震津波 | 夏目氏資料 | | | |
| 南伊豆町 | ⑩ | 西林寺 | 1854年(安政元年)の安政東海地震において妻良で、高さ5~6mの津波に襲われました。子浦では、西林寺の本堂の縁すれすれまで津波が押し寄せたとあります。 |  西林寺 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | ⑪ | 八幡神社 | 1854年(安政元年)の安政東海地震において子浦は、高さ5~6mの津波に襲われました。子浦では、八幡神社の石段の2段目まで津波が押し寄せたとあります。家屋の被害は、妻良で145軒のうちおよそ100軒が浸水し、5軒が流失しました。子浦では140~150軒のうち同じく100軒ほどが浸水し、6軒が流失しました。 |  八幡神社 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | ⑫ | 青野川 | 1854年(安政元年)の安政東海地震で津波が押し寄せ、弓ヶ浜砂丘の低所を乗り越え、また青野川沿いに浸入して背後の低地を水浸しにしたと思われます。津波で浜の家は流れ、伝馬船が河口から約3km上流の九条橋まで打上げられたと伝えられています。津波の高さは5m程度に達したと推定されています。 |  九条橋から見た青野川 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | ⑬ | 弓ヶ浜 | 1854年(安政元年)の安政東海地震において手石港の沿岸には高さ5m以内の津波が押し寄せ、弓ヶ浜砂丘の低所を乗り越え、青野川沿いに浸入して、背後の低地を水浸しにしました。このとき、河口から約3km上流の九条橋まで伝馬船が打上げられたと伝えられています。被害は、総家数146軒、倒壊18軒(12%)、物置小屋倒壊20個所でした。 |  弓ヶ浜 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | ⑭ | 手石の低地 | 共立湊病院の近く、通称「仲寺」と呼ばれる寺の石段下道道路の地盤高を測量したところ、海面上4.8mでした。宝永津波は安政津波と同様に、この程度の波高に達したそうです。 |  共立湊病院近く、通称「仲寺」があった地点 | 県GIS |
| | | 1707年 宝永地震津波 1854年 安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | ⑮ | 旧竹麻村(湊) | 南伊豆町田竹麻村(湊)では、吸江の下道、早稲田、寺の下まで潮が入り、大原丁畑に砂が入って浜となった。同じく手石では田尻畑、和田の前まで船が流されました(南伊豆町「山田家文書」)。吸江の下道は現在の山田書店前T字路交差点とみて、その標高は2.4mである。この高さをここでの津波の高さとする。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1703年 元禄地震津波 | | | 増訂大日本地震史料第二巻 |

| 市町名 | No. | 場所 | | 痕跡情報 | 情報元 |
|---------------|---------------|---------------|---|---|----------------|
| | | 地震名 | | | |
| 南伊豆町 | 16 | 手石・湊(吸江の下道) | | 『吸江(ぎゅうこう)山』という標高76.7mの山の南麓の平野部に、この古文書の所蔵者である山田健治氏の自宅があり、この家の前を東西に走る狭い道路が「吸江の下道」であって、標高3.3~3.4mであります。古文書原文に「潮はこの道を越えた」というのであるから、ここで津波浸水標高は3.4mほどであったことが分かります。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1703年元禄地震津波 | | | 増訂大日本地震史料第二巻 |
| | 17 | 湊 | | 筆者のまゝとして「早稲田の寺下まで潮入(仲寺の階段下T.P.4.8m)。田尻より大門口道まで押しよせる。」とあります。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | 大日本地震史料第二巻 | |
| | 18 | 湊(寺下) | | 「早稲田、寺下まで潮入、家前道に藪際迄、大原丁、田尻畑、和田の前迄、田尻より大門口道迄」 「寺下」の「寺」は修福寺を指すとのことであり、「寺下」とは寺へ参詣する旧道沿いの地点であると証言から判断された。旧道の南端で寺方向からの下り坂の終点でもある6.1mの標高点のある箇所、道に接する無舗装地面(道から一段下がっている共立湊病院の敷地脇)の高さを測量し、地盤高さとしてTP+5.4mを得た。一応この値を浸水深とするが、寺下という小字が現在の共立湊病院の敷地内にも広がっている地名であるため、精度は劣ると考えざるを得ない。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | 大日本地震史料第二巻 | |
| | 19 | 湊(大門口道) | | 「早稲田、寺下まで潮入、家前道に藪際迄、大原丁、田尻畑、和田の前迄、田尻より大門口道迄」 「大門口道まで」として、入り口と道路を挟んで反対側の畑の位置と地盤高を測定し、TP+3.2mを得、この値をここでの浸水深とする。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | 大日本地震史料第二巻 | |
| | 20 | 湊(田尻畑、和田の前) | | 「早稲田、寺下まで潮入、家前道に藪際迄、大原丁、田尻畑、和田の前迄、田尻より大門口道迄」 「田尻畑」は「田尻」、「和田」は「和田原」と呼ばれています。「和田の前」として、田尻と和田原の境界辺りである田の中の道路の位置を測定し、この一帯が平坦であることから近傍の標高点であるTP+3.2mを地盤高とし、原文は「和田の前迄」とあるので、この場所が浸水限界と考えられます。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | 大日本地震史料第二巻 | |
| 21 | 青野川河口 | | 青野川河口西岸の県道脇に小祠があり、「嘉永7年」と刻まれた石碑が建っていました。この地点は海面上3.8mであり、石碑が安政津波に関連するものであれば、それ以上の高さの津波が押し寄せたことの裏づけとなります。 | 県GIS | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | 羽島徳太郎 | | |
| 松崎町 | 22 | 円通寺 | |  円通寺 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽島徳太郎 |
| | 23 | 那賀川 | |  自身番跡地付近の那賀川 | 県GIS |
| 1854年安政東海地震津波 | | 羽島徳太郎 | | | |
| 西伊豆町 | 24 | 正円 | |  正円の町並み | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | 25 | 多爾夜神社 | |  多爾夜神社 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | 26 | 慈眼寺 | |  慈眼寺 | 県GIS |
| 1854年安政東海地震津波 | | 羽島徳太郎 | | | |
| 27 | 宇久須神社 | |  宇久須神社 | 県GIS | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽島徳太郎 | |
| 伊豆市 | 28 | 二ツ石 | |  二ツ石の町並み | 県GIS |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 羽島徳太郎 |
| 熱海市 | 29 | 初川 | |  初川河口12m付近 | 県GIS |
| | | 1923年関東大地震津波 | | | 夏目氏資料 羽島徳太郎 |
| | 30 | 今井半太夫自宅 | |  | 東北大学DB(B) |
| 1703年元禄地震津波 | | 新収日本地震史料第二巻別巻 | | | |

| 市町名 | No. | 場所 | 痕跡情報 | 情報元 | |
|-----|-------------------|--|--|--|----------------|
| | | 地震名 | | | 出典 |
| 伊東市 | 31 | 行運寺 | 1703年(元禄16年)元禄地震の津波では伊東市宇佐美では死者が380人出たとの碑文が留田の行運寺の供養碑にあります。元禄津波は引き汐がなくにわかには上げてきたとことです。1710年の宇佐美の人口は1750人(角川辞典)とされています。宇佐美村誌などによると海岸に沿った街道地域での被害は特に大きく、城宿(現在の宇佐美小学校)の岡まで来た人は助かった、とのこと。死者については「参百余人一説による五百余人」と記されています。また津波高は7~8mであったと推定されます。 |  行運寺と入口階段 | 県GIS |
| | | 1703年元禄地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | 32 | 海蔵寺 | 1703年(元禄16年)元禄地震の津波は、寺院入口の石段の上から3段目まで達し、1923年(大正12年)関東大地震では石段の下から7段目まで達していたと伝えられています。これらを参考に伊東の潮位表から平均海面上の潮位に補正をすると津波の高さは、関東大地震は5.3m、元禄津波は8.2mであったと思われます。 |  海蔵寺と津波が押し寄せた石段 | 県GIS |
| | | 1703年元禄地震津波 1923年関東大地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | 33 | 佛現寺 | 境内には1703年(元禄16年)元禄地震や1923年(大正12年)関東大地震の津波の供養碑が建てられており、当時の被害状況や教訓が刻まれています。元禄津波の慰霊碑には当村水没し163人の死者を弔う意味のことが書かれています。関東地震のものには「9月1日を忘るな、火の用心、安全なる高地に避難すべし」など教訓が刻まれています。元禄津波は伊東大川沿いに2.5km(地盤高約17m)も遡り上りほとんど平地部全域に大きく浸水しました。関東大地震では4.3~9mとバラつきがありました。 |  関東地震石(左)と元禄津波の慰霊碑(右下) | 県GIS |
| | | 1703年元禄地震津波 1923年関東大地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | 34 | 宇佐美小学校の北側道路 | 伊東市役所発行の2500分の1の都市計画地図(1995年)によると、宇佐美小学校の北側道路には標高9.4mの標高が記されています。ここまで逃げてようやく助かったという記録があるため、津波高さはこの丘の浸水高さの9.4mを少し越える程度であったと推定されます。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 第二巻別巻 |
| | 35 | 宇佐美・横枕 | 横枕については「ここに死体が漂着した」と解釈できる史料の記載があり、津波がこの位置まで押し寄せて引いていったと考えることができます。すなわち地盤高さが津波高さと考えることができ、ここでの地盤高さは7.7mであったので津波高さは7.7mと推定されます。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 |
| | 36 | 宇佐美・浄信寺跡 | 史料には「海嘯に逆浸シテ中絶ス」とある。つまりここにあった浄信寺は元禄地震の津波によって流出したということである。ここでの地盤高さは4.5mであり、寺が流されたので2m程度は冠水していた可能性があるため推定津波高さは最低6.5mと推定されます。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 |
| 37 | 伊東・松原不動 | 「津波のときは不動さんへ逃げろ」という口伝があったが、『松原村明細帳控』には、松原に関して海辺通りの標高の高いところにある家だけが残ったとされる記述があることから、海辺通りに存在しない「松原不動」は浸水した可能性があることから津波高さは5.5m以上であったと考えられます。 | | 東北大学DB(B) | |
| | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 | |
| 38 | よこまくり・ガソリンスタンド横道路 | 史料「いとう覚書き」には、「この地点まで津波がきたのではないかとと思われる」と記されています。伊東市の都市計画地図を参照して測定した結果によると「よこまくり」の通りの道路面の地盤高さは17.5mであるため、ここまで津波がきたとすると、この地点での津波高さは17.5mと推定されます。 | | 東北大学DB(B) | |
| | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 | |
| 39 | 南伊東駅・津波地蔵点 | 津波地蔵は現在すでに存在しないが、津波地蔵のあった場所には現在地元の人の手によって石碑が立てられています。この石碑には「元禄十六年大津波祈災犠牲者の冥福」と記されています。津波地蔵が津波の浸水限界点付近にたてられたことは、すでに伝承調査に基づいて指摘されており、この石碑のある位置での地盤高さは17.3mであるため、この値が元禄地震による津波のこの地点での高さといわれています。 | | 東北大学DB(B) | |
| | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 | |
| 40 | 赤瀬橋・櫓ヶ淵地域最低地盤面 | 櫓ヶ淵に「船具が漂着した」とされていることから津波は少なくとも、現在の櫓ヶ淵の市街地の標高の最低点には浸水しているはず。櫓ヶ淵の地区での標高の最低点での地盤高さを計測した結果15.4mであり、船がここに乗り上げるためには、少なくともその場所の冠水深さは50cmほどはあったはずであるため、ここでの津波高さは15.9mと推定されます。 | | 東北大学DB(B) | |
| | 1703年元禄地震津波 | | | 新取日本地震史料 補遺別巻 | |
| 沼津市 | 41 | 子聖神社 | 1854年(安政元年)の安政東海地震による津波で木負では110軒中、20軒が流失しました。河内川流域の子聖神社あたりまで網船が流れこみ、境内の松に網がかかっていたとの伝えがあります。ここは津波が遡りやすい地形です。この伝えが正しければ津波は10mを超えたことになります。 |  子聖神社 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 夏目氏資料 |
| | 42 | 光明寺 | 光明寺過去帳には、「1854年(安政元年)の安政東海地震による津波により本堂の床上90cmまで浸水、3名の水死者が出た」等の記述があります。また、庫裏玄関内側の土壁には、当時の浸水面の痕跡があったといわれています。 |  光明寺 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| 43 | 重須 光明寺 | 光明寺の庫裏玄関内側の土壁には、その時の浸水面の痕跡があったという。住職の指示した浸水面は土間上170cmあり、「本堂床上三尺」の浸水記録と潮位面が同一レベルにあることが、ハンドレベルで確かめられた。光明寺石段下の道路面はT.P.上3.6m、津波の高さはなんとT.P.上6.7mにもなります。 | | 東北大学DB(A) | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 日本地震史料 | |
| 44 | 安養寺 | 1854年(安政元年)の安政東海地震の津波を経験した旧家がありました。津波は1階のハリ上(床上1.8m)まで浸水したと伝えられています。幸い屋の下だったため(流速が弱く)流出は免れた様です。この高さは安養寺境内本堂階段の2段目の高さ(TP6.2m)に相当します。別の資料にも安養寺・住本寺無事との記録もあります。長浜村では60軒の内約半数が流出し三津村での記録では残る家見えず、小海村も30軒の内17~18軒が流されたと言われます。三津でもほとんどの家が流れたとの記録もあります。内浦湾沿岸は波の高さが6~7mクラスに達したものと想定されています。 |  安養寺 | 県GIS | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 | |

| 市町名 | No. | 場所 | | 痕跡情報 | 情報元 |
|-----|---------------|--------------------|---|---|---------------|
| | | 地震名 | | | |
| 沼津市 | 45 | 内浦三津 | | 「小島筋」とは、内浦湾にある三津の旧道のうち三津橋に注ぐ川の北側であり、「浜之方」とは道の浜側を言い、道はほぼ平坦であり、標高点近くの民家前の位置及び地盤高を津浪痕跡高の代表点として計測すると標高はTP+2.2mでした。床を地盤から60cmの高さ、さらに床からの浸水深を3尺(約90cm)とすると、地盤からの浸水深は1.5mとなります。標高に加えると、浸水深はTP+3.7mとなります。 | 東北大学DB(A) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 大日本地震史料第二巻 |
| | 46 | 内浦 | | 本文に「三津浜の家々床上2~3尺浸水(町の中ほど、石井医院前路面T.P.上2.2m)」とあります。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 大日本地震史料第二巻 |
| | 47 | 三光寺 | | 1854年(安政元年)の安政東海地震の津波により戸田村では水死者30人がでる大きな被害を受けました。この津波は三光寺の門前石段2段目まで到達し海面上約3.3mと推定されています。住民は寺の裏山の竹藪に避難したそうです。下田で被害を受けたディアナ号の乗組員とその家族およそ500人を受け入れ帰国船ヘダ号を完成させました。西洋造船の技術を学ぶことができました。 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 |
| | 48 | 戸田 三光寺石段 | | 史料には「石段3~4段目まで浸水」とあります。本文に「三光寺門前の石段2~3段目まで津波が上が(り) (中略) 石段2段目の測量値はT.P.上3.1mであることから、津波の高さはせいぜい3.5m程度である」とあります。石段の段数が異なるので、どちらか錯誤していると思われます。 | 東北大学DB(A) |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 日本地震史料第四巻 |
| 静岡市 | 49 | 三保神社 現御穂神社(みほじんじゃ) | | 1854年(安政元年)の安政東海地震により全壊した民家は2,3軒でしたが、瓦屋根の家は全部倒壊し、傾いた家が多数ありました。清水港からも津波が上が(り)、御穂神社付近の路上で1m前後の深さに浸水しました。3mの最大波高を示し、船や網が打ち上げられ、家屋が倒壊し、麦や松林が枯れました。 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| | 50 | 清水区三保(高札のあった場所) | | 「江湖は札ノ辻迄浪上り」三保在住の地元歴史家遠藤章二氏から、江戸期にこの高札が立っていたとされる場所を教えて頂き、高札のあったとされる場所の地盤高を津浪痕跡高として測定を行い、TP+4.2mを得た。この点が浸水限界であり、この値を遡上高とする。 | 東北大学DB(A) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 新取日本地震史料第三巻別巻 |
| | 51 | 清水区三保(江湖地区) | | 「江湖は札ノ辻迄浪上り」清水区役所でのヒアリング及び資料により、「江湖(えご)」は旧国鉄清水港線の跡地(現在は歩行者道となっている)付近であることが判明した。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 新取日本地震史料第三巻別巻 |
| | 52 | 三保(江湖) | | 三保では「中あくら」より真崎の間の村内に船が流れ通った。また、「真崎」では松が1丈余も海中に沈み、松の先端だけが見える光景になったとも記録された。一方、陸上に上がった津波は「家ノ前」の家々を大破し、「江湖」(いまの貝島あたり)では札の辻下まで波が押し寄せたという。この記録は安政東海地震津波の状況とも似ており、5m程度の波高とみなせます。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年宝永地震津波 | | | 新取日本地震史料第三巻別巻 |
| | 53 | 巴川河口付近 | | 「向島」(巴川東岸地域)を津波が乗り越えたと記録され、巴川が溢れたものと合流したようである。その頃(明治24年)、向島の水準点は3.2mであった。現在、港管理事務所前(日ノ出棧橋)の地盤高は2.3mあり、巴川河口付近では津波は3m程度の波高と思われます。 | 東北大学DB(B) |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 新取日本地震史料第五巻 |
| | 54 | 白髭神社 | | 1854年(安政元年)の安政東海地震の津波は駿河区下島では大波が浜川を遡って白髭神社まで海水が浸入し、森のスキ、ヒノキなどが枯れたとの記録があります。安政東海地震津波はこの付近は河川からの遡上によって平野部に浸水しました。 | 県GIS |
| | | 1854年安政東海地震津波 | | | 夏目氏資料 |
| 55 | 湊橋 | | 相良町の「波津」では1854年(安政元年)の安政東海地震の直後大きな海鳴りがして海水が引いた後、山のような津波が押し寄せ萩間川、樋尻川を激しく遡上し、市街地に浸水し、萩間川に流れ込んだ津波は、河口にかかる湊橋を大破して、徳村にも舟が3隻打ち上げられたようです。当時の相良からの手紙から、津波はおおよそ1丈7尺(5.1m)程度あったとのこと。浄心寺(4.5m)の東にも漁船が流れ込んだとの記録もあります。この地震津波で萩間川の水深が1mほど浅くなりました。それまで今の湊橋まで船船が往来し、貨物の積み下ろしに便利でしたが、その後は小さい船しか出入りができなくなったと伝えられています。 | 県GIS | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 羽鳥徳太郎 夏目氏資料 | |
| 56 | 相良 | | 「堀之奥江治左エ門廻船被打入」治左エ門の屋敷があった場所及び宝永当時もあったと考えられる相良城の堀の位置が判明した。堀の石積みの上端部高さ測定しTP+4.6mを得た。また、船の舳先はこれに乗り上げたので30cmを加えると浸水深は4.9mとなります。 | 東北大学DB(A) | |
| | 1707年宝永地震津波 | | | 東海地方地震津波史料(1・上巻) | |
| 57 | 旧三俣村 喜右衛門新田 | | 菊川の1.5km上流の旧三俣村喜右衛門新田で、腰たけの津波が上がった、と伝えられる。旧地形図によると、喜右衛門新田の標高は高いところ5mあるが、低地に上がったとすれば潮位は4mぐらゐと推定されます。 | 東北大学DB(B) | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 大庭(1957年) | |
| 58 | 旧駒場付近 | | 1854年(安政元年)の安政東海地震による津波は天竜川をさかのぼり、海岸から30町で汐高は平水より1.5丈高く、川口の中ノ浜(中河)が崩壊しました。掛塚での津波の高さは4.5mでした。 | 県GIS | |
| | 1854年安政東海地震津波 | | | 静岡県地震災害史 | |



三光寺



御穂神社



白髭神社



相良・萩間川



駒場から見た天竜川

| 市町名 | No. | 場所 | | 痕跡情報 | 情報元 | |
|--------------|----------------|--------------------------------|---|---|---|----------------|
| | | 地震名 | | | | |
| 浜 松 市 | 59 | 浜松城 | | 1854年(安政元年)の安政東海地震において旧浜松では浜松城の門1つ、角倉1つが落ち、寺院や瓦の家は大きな被害を受けましたが死者はなかったようです。浜松城は明治維新後、城郭は壊されましたが、昭和33年、旧天守台の上に新天守閣を再建したものです。津波は、馬郡村では「汐除堤を3度越し東海道が5~6尺(1.5~1.8m)ほど汐水につき、坪内村(標高3.7m)も一面浸水したとの記録もあります。今切口から回り込んだ津波は東海道を北から浸入し、浜松市篠原の玉蔵寺の境内に迫ったと伝えられています。「村櫛あたりはこのほか高潮、宇布見村では村中汐水が入り、家道具類や俵物まで流され、目も当てられぬ状況だ」と言われています。 |  復元された浜松城 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 夏目氏資料 |
| | 60 | 気賀関所 | | 1707年(宝永4年)宝永地震で気賀の関所御門がかたむき、欄干は残らず倒れ、石垣も破損しました。祝田村も強くゆれ、道路が通行できなくなった所もありました。震度は、気賀で5と想定されています。津波により本高2600石余の土地が、田畑1700石余荒地になり、長く潮が引きませんでした。1854年(安政元年)の安政東海地震でも関所の石垣などが崩れ、また津波で田畑2,800石ほどの土地が塩水につかりました。津波で塩水にまみれた土地に土を盛り畳表に使うイグサを植え、以来、畳表生産が瀬江の特産品となりました。 |  気賀の関所 | 県GIS |
| | | 1707年 宝永地震津波 1854年 安政東海地震津波 | | | | 静岡県地震災害史 |
| | 61 | 宝登山 | | 舞阪町の旧家の記録によると1854年(安政元年)の安政東海地震の後しばらくすると津波が来ました。船場で高さ3丈(10m)近くあったように見え、これを避けるため地盤の高い氏神の山、あるいは宝登山(奉燈山)に登り難を避けたといわれています。浜松藩の年貢米を積んだ500石船が津波により流され宿の北側の新田堤の上に漂着したとも書かれています。山の標高は4.9mあり舞阪町の最も高いところ です。 | | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 参考PPT |
| | 62 | 舞阪 | | 安政時代には260戸位あり全戸浸水流失家屋死者等はなし、津浪の際には町の中央部南の神社及寺のあるやや高地に避難せし由。浸水区域は舞阪町全部(一部の高地を除く)、篠原村馬郡、雄踏村宇布見の低地全部浸水せしが如きも区域不明。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 日本地震史料(1951年) |
| 63 | 舞阪 旧角屋ノバ店内 | | 「カモイまで津波上がる」 舞阪漁港の灯明台近くに「角屋」という旧家がある。津浪はこの家のカモイまで浸水した記録があります。 | | 東北大学DB(A) | |
| | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 新収日本地震史料第五巻 | |
| 64 | 舞阪(一里塚跡路面) | | 本文に「港から押し上がった津波は”一里塚”跡まできたと伝えられ、T.P.上2.4mの地盤高である。旧東海道の路面すれすれに浸水したことから、町内の潮位はT.P.上2.5m程度とみなせよ」とあります。 | | 東北大学DB(B) | |
| | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 記載なし | |
| 湖 西 市 | 65 | 新居 | | 本文に「戸数665うち流失120。1丈(約303cm:白石註)ほどの津波3回、関所跡かたなし(大元屋敷跡の路面T.P.上1.8m)」「当時、大元屋敷に関所があり(屋敷跡の道路面T.P.上1.8m)、(中略)浸水潮位はT.P.上3m。」とあります。 | | 東北大学DB(B) |
| | | 1707年 宝永地震津波 | | | | 旧本陣四田家所蔵 |
| | 66 | 東新寺 | | 1854年(安政元年)の安政東海地震では台地の下にあった東海道の旧大倉戸村付近では、街道北側の家屋の傷みは少なく、南側で13戸が半潰しました。山崩れで砂煙が上がり、立場(街道の休み場)付近は地面に亀裂が入り田畑からは泥水が1mほど噴き上がったそうです。地震の約1時間後、津波が波除堤防5箇所から流入しましたが、人々は地震後すぐに山に登り人的被害は免れたようです。今後の心得として東新寺の4世真宗は手記を残されました。(安政大地震並大津波記録) |  東新寺 | 県GIS |
| | | 1854年 安政東海地震津波 | | | | 渡邊氏(湖西市大倉村の記録) |
| | 67 | 白須賀宿 | | 海岸付近にあった元の白須賀宿(現在の湖西市元町)には1498年の明応地震津波や高波で全村流出し7人の者が坂の上に移住したとの言い伝えがあります。また1605年の慶長地震津波では「津波が宿に流入し、人は溺れ、山に逃げたもののみ助かり牛馬は死んだ」と林羅山が当時の白須賀宿の主人に聞いた話としての記録が残っています(羅山先生文章)。1707年の宝永地震津波などによって段丘の下・海岸沿いにあった「宿場」は大きな被害を受けたため、宿場は宝永5年に助成を受け現在の台地の上に移転しました。 |  現在の白須賀の町並み | 県GIS |
| 1707年 宝永地震津波 | | 渡邊氏 | | | | |